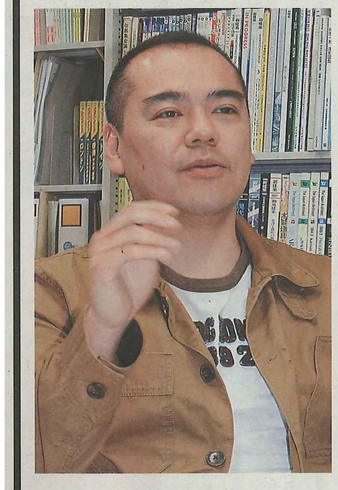
ここが聞きたい

人口が減少傾向の中、公共施設の老朽化や再配置は、どの自治体にも共通する頭の痛い問題だ。苫小牧市は、築50年近い市民会館など五つの施設をまとめ、新たな複合施設（市民ホール）を建てる計画を進めている。これまで基本構想の議論をリードしてきた「苫小牧市民ホール建設検討委員会」委員長の森傑（すぐる）・北大大学院教授（42）に、今後の公共施設のあり方について聞いてみた。（細川智子）

苫小牧市民ホール 目指す姿は

北大大学院教授 森傑さん

誰もが親しめる空間に



もり・すぐる　73年兵庫県生まれ。大阪大大学院工学研究科博士課程を修了後、01年に北大大学院工学研究科助手に着任。准教授を経て、10年から同大学院工学研究院教授。専門は建築計画・都市計画。札幌市在住。

苫小牧市民ホール計画　岩倉博文市長の3期目の公約。2015年度に基本構想を策定した。本年度から2年間で基本計画をまとめ、設計を経て21年度の着工を目指す。基本計画の策定は構想と同様、北大に委託し、専門家や公募市民ら7人でつくる「市民ホール建設検討委員会」での議論などを踏まえて進めていく。7月から作業が始まる。

――昨年度から苫小牧市の計画に関わっています。

「公共施設のマネジメントを研究しています。研究室として自治体から受託し、実際に施設の設計や再配置も手掛けています。十勝管内上士幌町では30年後を見据え、中心部の半径800㍍内に町民の住環境を集約する事業を進めています。こうしたことを知った苫小牧市の担当者から市民会館建て替えの相談がありました。時代に合った施設整備と市民参加型の計画づくりを提案し、基本構想から携わることになりました」

――各自治体は公共施設の老朽化に直面しています。

「高度成長期の1970～80年、人口増加に合わせてどんどん施設を増やしましたが、現在は余っている状態。機能や用途もニーズに合わなくなっています」

――再編や統合はどうすればよいのでしょうか。

「今の建築物は60～100年保ちます。公共施設の更新や再編・統合も、将来のあるべき姿を想定し、それに向けて計画していく『バックキャスティング』という考え方が求められています。『市民会館には現在1600席のホールがあるから、新たな施設にも同規模のものが必要だ』などとつい既存施設の延長線上で考えがちですが、数十年後の公共施設のあり方をゼロから考えなければなりません」

――検討委員会は昨年度1年間、基本構想について議論し、複合施設のテーマを「親近感と愛着を持てる憩いのプラザ・苫小牧市民のサードプレイス」としました。

「サードプレイスとは、家、学校・職場に次ぐ第3の居場所を意味します。公共施設の捉え方は世界的に『ある機能を利用する場所』から『日常生活の居場所』へと変わってきています。対価としてのサービスを得られる場所は公共施設でなくてもいい。プロのための劇場なら、お金がある人しか行けません。税金で整備する以上、誰もが分け隔てなく使えることが大切。いつでも立ち寄れるような、豊かなパブリックスペース（公共空間）を備えることが必要です」

――これからの公共施設の役割は。

「抽象的ですが、一人一人の日常生活の質を高めることだと考えます」

――市民の間では建設場所への関心が集まっています。

「検討委員会では、市外から人を呼び込むよりは、市民がふらっと立ち寄ってお茶を飲んでいたり、子どもたちがゲームを楽しんでいたりする『憩いの場』として機能させたいと話しました。苫小牧市民にとっての行きやすさを最優先に考えると、多くの人にとって『日常の足』は車、お年寄りではバスでしょうから、ここがポイントになるかと思います」